

れきみん

## 資料館だより

No. Ⅲ-29

相生市立歴史民俗資料館

## 〈連載 矢野荘-「中世あいおい」へのいざない-1〉 中世の荘園

〈はじめに〉 荘園は日本中世の国家・社会の骨格・システムを規定する最も重要な要素とされ、これまで研究が積み重ねられてきました。結果、多くの成果をあげ、豊かで具体的な中世史像が描かれるようになりました。しかし、歴史教育の現場では最も難解で取っつきにくいテーマとして敬遠される傾向があったことも事実です。

そこで、相生市域が播磨国矢野荘の荘域とほぼ重なり、「東寺百合文書」をはじめ豊富な関係史料が残されているという強みを生かし、具体的で平易な荘園史を紹介していこうと考えました。幸い相生市では、『相生市史』の刊行により、第1巻・第2巻の叙述と第7巻・第8巻上下に収められた史料を基に荘園史を包括的に知ることができます。また、市域のあちこちに中世の痕跡(神社、寺院跡・城跡等の遺跡、地名、景観など)が残されており、それらを総合することより具体的なイメージを創りあげることができるものと思われまふ。これから、『相生市史』とその後の研究成果に基づき、「中世あいおい」に生きた人々の息づかいが感じられるよう、矢野荘の歴史を少しずつ紐解いていきます。

〈中世の荘園〉 中世の荘園は在地領主りようけいの所領寄進あすかりどころによって成立します。最初に寄進した在地領主は下司、寄進を中継した貴族は領家や預所、再寄進を受けた院や有力寺社などは本家などとなって、荘園を重層的に支配・領有しました。畿内とその周辺地域では、下級貴族の開墾地や寺僧の私領が、上級貴族や寺院に寄進・施入せにゆうされて荘園になることが多かったようです。

個々の荘園支配体制は、検注けんちゆう\*1とそれに基づく一連の台帳(検注帳など)の作成によって固められました。荘園の内部は大きくじ除田じよでん\*2と定田じようでんとに分けられます。定田は、普通いくつかのみに分割・編成されました。名は年貢・公事くし\*3の徴収単位で、その名に編成された百姓のうち有力者が名主みょうしゆに任命され、荘官の監督のもとで課役の上納責任者とされました。

荘園は重層する複数の所有者たちによって支配・領有されてきましたが、やがて下地中分したじちゆうぶん\*4や年貢請負などを通じて錯綜した支配が整理され、一元的に支配されるものが増えていきました。

なお、荘園はきわめて多様な存在形態をとり、一つの荘園をモデルとして一元的に論ずることはできないといわれています。また、成立期(10世紀~12世紀末頃 古代的初期荘園を除く)から発展期(12世紀末頃~14世紀中頃)、動揺・解体期(14世紀後半~15世紀末頃)へと大きく変化していきます。

- \*1 検注…土地の領有者が徴税対象地と徴税請負者を確定し、官物・年貢・公事などを徴収するための土地調査。
- \*2 除田…荘園領主があらかじめ年貢收取の対象から除外した田地で、現地の寺社の給田や下司・公文などの荘官給田などがある。
- \*3 公事…荘園領主側の儀式や年中行事などをまかなうために現物が課された。行事ごとに細かく定められ多様な形態をとった。農産物や器物のほか臨時的人夫役もあった。
- \*4 下地中分…実質的荘務権をもつ荘園領主と地頭との間の年貢や公事をめぐる相論を解決するために、和与(和解・合意)や訴訟によって下地(土地・生産の場)を分割すること。13世紀中頃~14世紀末頃に行われた。

〈参考・引用文献〉

永原慶二 1998 『荘園』 日本歴史叢書(吉川弘文館)

永原慶二監修 1999 『岩波 日本史辞典』(岩波書店)

## 〈資料紹介20〉佐方1号墳—破壊された前方後円墳—

当資料館2階に、高い凸帯を有する円筒埴輪片が展示されています。底部を欠きませんが、口径は26cm前後に復元できます。この埴輪は赤穂市立有年考古館所蔵資料で、佐方1号墳(佐方裏山古墳)(甕形)で採集されたものです。

松岡秀夫(故人・元財団法人有年考古館館長)は、1979年(昭和54)に学術雑誌で報告し、編年的位置づけを行っています(松岡1979)。また、後に『有年考古館蔵品図録』でも紹介されています(西播流域史研究会編1991)。

松岡は、展示資料のほかにも2点の円筒埴輪片(凸帯部と底部)を図示し、4世紀後半の時期を想定しています。また、古墳について、

「佐方の裏山中腹に相接してほぼ同大の3基の古墳がある。いずれも径15m前後の円墳で、中央の1基は墳丘の大部分が破壊されていて、そこに竪穴式石室の一部とみられる円礫の石組が残っている。出土遺物は知られていない。埴輪片は残存する墳丘から採取された。」(漢数字はアラビア数字に改めた)と記しています(松岡1979)。

その後、1990年代後半～2000年代前半に、分布調査・測量調査による播磨地域の前方後円墳の認定が進む中で、佐方1号墳も前方後円墳であるとの説が有力になりました(松本2001・岸本編2001など)。

現地で南東に延びる尾根を観察すると、北側に円墳とみられる墳丘状の高まりが確認できるもの(松岡が記す3基のうちの1基と思われる)、南東側頂部は掘削され長大な窪地になっており(窪地は戦中に高射砲が設置されていた跡といわれている)、古墳としての形状は大きく損なわれています。しかし、周囲をよく観察すると、全長約33mの前方後円墳形の墳丘を想定することが可能です(松岡が記した3基のうちの2基に当たるものと思われる)。また、播磨地域最古級とされる円筒埴輪を伴うことから(播磨地域での埴輪の出現は特殊器台形埴輪を除くと遅く、4世紀後半とされている)、佐方1号墳は円墳より前方後円墳のほうが相応しいと考えるのが妥当です。

注目されるのは、佐方1号墳が相生湾最奥部「佐方浦」を見下ろす位置に築かれていることです。播磨灘から相生湾を通して佐方に至る海上交通と陸から那波を経て赤穂方面に続く陸上交通の結節点に当たり、被葬者は倭王権から交通・流通の掌握・管理を認められた人物といえるかも知れません。近い時期に築造され、相生湾が最も狭くなった海域を見下ろす位置に立地する甲崎古墳(墳長約47mの前方後円墳)との関係も無視できないように思われます。

いずれにしても、佐方1号墳と採集埴輪は、「古墳時代のあいおい」を解明していくうえで欠かすことのできない重要な考古資料といえるでしょう。

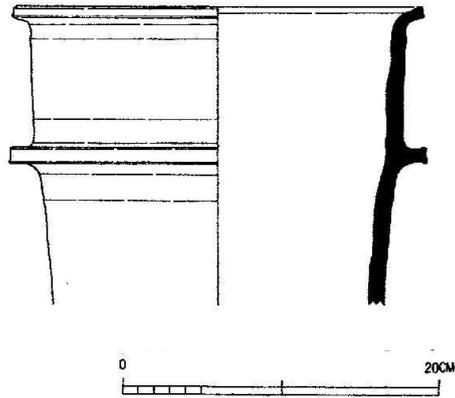
〈参考・引用文献〉

岸本道昭編2001『前方後円墳からみた播磨』集会の記録(第1回播磨考古学研究会実行委員会)

西播流域史研究会編1991『有年考古館蔵品図録』(財団法人有年考古館)

松岡秀夫1979「赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年」『考古学研究』102号(考古学研究会)

松本正信2001「資料紹介2」『前方後円墳からみた播磨』資料集(第1回播磨考古学研究会実行委員会)



佐方1号墳採集円筒埴輪実測図(西播流域史研究会編1991)  
(赤穂市立有年考古館所蔵、当資料館展示)

(中濱久喜)